

☆10月・11月・12月・1月の活動☆

採集観察会のお知らせ 神奈川県厚木市「飯山観音」

採集観察会 第3回 10月17日(日) 10時 雨天決行 [次回は2月27日]

●集合地点: 小田急線「本厚木」駅 北口 (改札を出たら左へ。人が集まっている)

駅前バス乗り場4番から⑩⑪⑫系統バスに乗車。バス停「飯山観音」下車

世話人は木村知之 (TEL.044-955-1610) ・高橋祐子 (TEL.0465-47-7905)

合同例会の案内 期日・所 12月5日(日) 午前10時開会 駒場住区センター

講演と総会と懇親会 世話人は谷川明男 (事務局代行 / TEL.0467-32-5457)

駒場住区センターは東急井の頭線「駒場東大前」下車、徒歩10分 ☆例会費 500円

●同封の葉書で出欠・近況(通信に掲載あり)を谷川明男までお知らせ下さい。

事務局および会計について

事務局・会計の熊田憲一氏が転居されたため、関連事務の遂行が不可能になりました。4月総会までの事務局・会計を谷川明男が代行します。

当面の事務局関係の連絡は下記にお願いします。なお、振込先は変わりません。

★谷川明男 〒248 神奈川県鎌倉市七里ガ浜2-3-1 県立七里ガ浜高校

熊野合宿報告

合同

台風の中の懲りない面々

新海 明

かつて笠岡文雄さんが「雨の中の懲りない面々」と題した採集会の報告記事を書かれているが、久しぶりに同じことを演じた合宿だった。今年の夏は雨ばかり降り続いたが、7月24日(土)も朝から雨が降ったりやんだりの生憎の天気で、ニュースは折しも台風4号の接近を伝えていた。

熊野路はやはり遠かった。名古屋で新幹線から紀勢本線に乗り継ぎ特急でなんと3時間余りかかるて目的地の熊野市駅に到着した。名古屋から同道した小澤さんと駅前の食堂で昼食をとり、明日の昼食になる熊野名物の「めはり寿司とサンマ寿司」の折り詰めを注文して民宿「ハタイ」へむかう。宿舎に着くとすでに貞元、池田、平松の各氏が到着していた。三氏は夜行直通バスで今朝早く現地入りして、すでに付近の山でムシバミコガネグモやユアギグモを探集していた。私はというと、相棒の高橋祐子さんが急に参加できなくなったため、二日目の昼食の手配や部屋割り、観察地のトイレの確認など塩崎さんや金野さんに手伝っていただいて準備をした。この間にも天候はしだいに悪化しつつあった。夕方近くになると参加者はほぼ揃い、一部の人たちは「天気が良い?うちに」と採集中でかけた。この時に熊田さんが早速ムツトゲイセキグモを発見採集して持ち帰り、参加者は興奮のおももちでクモが入っているクダビンを覗き込んでいた。

今回の合同合宿では遠くは九州の大熊千代子さんをはじめ全国から延べ37名の申し込みがあり、民宿の食堂では一堂に会すことができず、2回にわけて順次食事にしてもらうほどであった。夕食が終わるころになると断続的に風雨はさらに増してきた。テレビは台風が紀伊半島を直撃する旨を繰り返し伝えていた。恒例の夜間観察をどうしようかと担当者としては迷ったが、しかし私はいつも「迷ったらやってみよう」という主義である。やらずに後悔するよりも、やって後悔する方がまだマシである。「この風雨の中でやるの？」と吉田真さんなどからあきれられつつも、夜間採集を決行することにした。30余名を目的地まで運ぶ車が9台もあり、この車をつなげて走らせるだけでも一苦労である。幸い、観察地には駐車場があったので駐車には困らなかった。そこに下り立ち懐中電灯をつけると、さっそく「キヌアミグモがいた」という声が聞こえた。実は私もキヌアミグモを今まで一度も見たことがないのだ。ヒメグモのようなシート状の網にこのクモが静止していた。シートにはメッシュが刻み込まれている。スズミグモの網よりはるかに小形であるが、その作りは紛れもなくスズミグモ属のものであった。ここでは2個体が発見されたが、見物人が多くとてもゆっくりと観察ができるような状態ではなかった。平松さんや金野さんはここでもユアギグモを発見したので、参加者にこれを見てもらうことにした。水平の円網に無数のタテ糸が走る特徴のある網の中心にクモがとまっていた。クモは小さくて発見が困難だがその網は一度見たら絶対忘れないものだろう。今後、地元に帰った参加者からの発見の続報が届くことを期待しようと思う。

夜間観察地は熊野市駅の裏の丘にある簡易保険センターの宿泊所の裏手にあたり、付近にはミカンの畑が広がっていた。夕方に採集したムツトゲもここにいたのである。参加者一同ここが絶好の調査地であるとの印象は一致したのだが、近く台風の鳴りはいや増すばかりであった。初めのうちはさして気にならなかった雨もしだいに激しさを増していった。「ゴオーッ」と唸って接近してきたのは風かと思っていたら、ものすごい勢いで降ってきた雨の音であった。こうなると、あとはただ傘をさしてじっとするのみである。動けば濡れるから、ただ雨が小止みになるのをひたすら待つだけである。そんなことを何回か繰り返したが、さすがにもういけないというひどい降りになってきた。それでも1時間ほど経過しただろか熱心な観察や採集はまだ道沿いやミカン畑のなかで繰り広げられていたが、これまでということになり「台風の中の憲りない面々」はやっと帰路についたのであった。

宿舎に着くと皆すぶ濡れではあったが、なんとはなしに満足感を漂わせたような表情に見えたのは、幹事たる私の自惚れゆえの錯覚であろうか。

来年の合宿の候補地は丹波方面の予定です。7月23日(土)～25日(月)
担当(予定)；池田博明

昆虫の化石の産地として知られる秋田県の三途川（さんずがわ）層で発見されたクモ化石につき、新聞に発表した当事者として、その経緯を報告しておきたい。

三途川層の転石から見つかった同化石は、クモのようだということで、地元新聞社や化石研究者を転々として私に持ち込まれたのは、一昨年の暮れ。クモが大好きで、割りに長い人生をクモとつき合ってきた私は、一生に一度はクモ化石とめぐり合いたいと思っていただけに、大変な研究材料を得た思いでした。

しかし、地学に対する基礎知識の少ない私が、確かにクモであるという私なりの結論を得るには一ヶ月以上の月日を必要としました。その結果が、秋田県の化石にも詳しい元国立科学博物館古生物第二研究室長、藤山家徳先生の談話を入れた秋田さきかけ新聞（1991年12月17日付朝刊）のクモ化石ニュースとなったのです。そして責任上、同新聞の文化欄（1991年12月25日付夕刊）で報告したのが、東京蜘蛛談話会通信No.78資料の内容です。

このクモ化石の調査については、まず昭和30年代から私のクモ研究でお世話になっている八木沼健夫先生にお願いして塩原温泉（栃木県）・上和田（山形県）・海上（兵庫県）・上萩ノ島（岐阜県）など、これまで国内で発見されたクモ化石についての文献・資料を恵与いただきました。同時に、国立博物館、地元大学の化石専門家をはじめ、主として東北地方の各博物館、科学博物館、大学、高校、また化石の専門家への電話取材を行い、資料提供を依頼、クモ化石に対する知識を与えていただきました。おかげさまで三途川層と同じ新生代第三紀、新第三期中新世後期という地学上の概念をつかむことができました。

さて、問題のクモ化石ですが、体長約8ミリ、頭胸部は凝灰岩の中のため不鮮明。腹部と5本の足の腿節部がはっきりと判るもので、年代約650万年前という化石の世界から見ると、ごく若いもので泥が固まつたものですから非常にもろいものです。

一見すると、水棲昆虫のヤゴ類、またアリ類らしくもありますが、脚式はやはりクモ。ちょうど死んだクモが8本の足を膝節から折り曲げて腹部に抱えた形のものです。

さらに腹部の形態などからは、ジグモ、ワスレナグモやサラグモ等が考えられましたが、幸い腿節部分が鮮明ですので、体長と腿節の長さの比率を出してみたところ、以上のクモが消去され、コガネグモ科が最も近い比率となったのです。

腹部には、色彩がわずかに残っているかにも見えますが、これについては博物館、大学関係の化石専門家は「若い地層では条件が良ければ色が残ることもあり得る」との答えでした。

紙数上、ここではあまりくわしく記されませんが、化石の体長（頭胸部が不確実なので、約）と腿節の長さの比率（%表示）はつぎのとおりでした。

化石は5本の足しか確定できませんので、便宜上、左側から時計回りに①～⑤までとし、現在のクモ標本（私の採集した秋田産のクモ）も4番まで記しました。

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|----------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 化石 | 43.636 | 33.636 | 18.181 | 35.545 | 21.818 |
| カニガニモ | 42.5 | 37.5 | 22.5 | 37.5 | |
| ジグモ | 15.0 | 20.312 | 15.625 | 13.437 | |
| ワスレナグモ | 26.037 | 12.075 | 28.301 | 23.018 | |
| ユノハマサラグモ | 75.0 | 70.0 | 50.0 | 70.0 | |

シロブチサラグモ、コシロブチサラグモも比率はユノハマサラグモとほぼ同じ、アシナガサラグ

モに至っては80%ほどの比率がありました。ご存じの通りサラグモ類は腿節が非常に長いのです。

ご覧の通りナガコガネグモが最も化石に近い比率を見せました。

以上のことなどから最終的にコガネグモ科という一応の答を出したものです。しかし、これはあくまでも私の結論なのです。

クモの化石は同定が難しく、とくに属や種までは無理だとされます。つまり最終決定とされます雌の外雌器、雄の触肢杯葉などの確認ができないからでしょう。

化石の形態からの組合わせや、思いつきでクモ化石とし、さらに色具合からコガネグモ科という仮説を立てたのではないのです。いろいろと化石研究家のお力を得、さらに順次に未知数の種をへらしてゆく消去法によって、クモであり、コガネグモ科であるという私なりの結論を出したのでした。

私は毎年数回、地元新聞や自然保護関係、農業関係誌にクモについて記事を書き、もっぱらクモへの理解を秋田県民に求めており、大きな効果があがってきていると認めております。

今回のクモ化石についても、その意味がかなり含まれたもので、ナガコガネグモではなかろうかとの推定まで入れたのも、理解と化石のロマンをかきたたせるためのものでした。

私がみなさんにこのクモ化石はなんでしょうと申し述べること自体が大変に無理なことと思っております。判定の難しい化石もあるのです。私がクモ化石と決定していることにも問題があるかもしれません。しかし、それを追求するのが学問であるでしょうし、浅学きわまりない私の結論が、クモ化石であったのです。

最後になりましたが、九州の菊屋奈良義さんが、コガネグモ科ではないといったのではなく、秋田でこのクモ化石を太陽のもとでルーベでごらんになり、しばらくして「サラグモです」と言われたと聞いております。この化石を採集した化石研究40数年という化石提供者の説明不足で、すでに新聞発表された化石とはご承知ならなかったと思います。私はひとつの学問を進めていくうえの、ありがたい「お告げ」をいただいたとも考えております。

以上、長々とずいぶん口はばついたことを記してしまいました。不遜をお許し下さい。

八木沼先生にはお体の不調な折り、この件につきましては大変に心労をわざらわし、ご迷惑をおかけしました。深くおわび致します。

クモをなによりも仲間とされるみなさま、今後ともよろしくご指導下さいますよう、心からお願い致します。

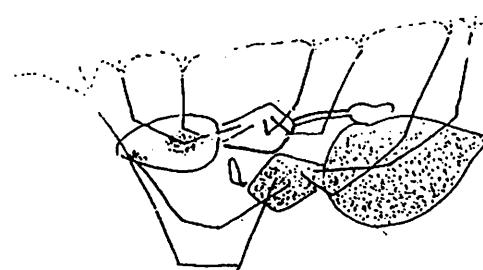
● ギボシヒメグモ飼育失敗報告

加藤むつみ

昨年（1992年），ギボシヒメグモ（黒タイプ）一匹が、卵から成体（♀）まで育ったことを報告したが、その後彼女は3回（1992.9.20, 9.29, 10.10）卵のうを作った。いずれも朝完成し、その日のうちに食べられた。おそらく空の卵のうだったのだろう。雄がいなかつたための当然の結果だったが、少し心が痛んだ。ちなみに彼女はその年の12月5日まで生存していた。・

今年（1993.7.11）は脱皮殻を探る目的で、又あわよくば変異個体間の雑種を作る目的で、神奈川・飯山観音敷地内より雌雄1個体ずつを持ち帰った。雄は赤、雌は黒の組合せである。成体ではないということだったのだが、雄の方は色・形ともに、去年観察した成体そっくりだったし、交接の時期が遅れると受精能が落ちるという報告（1969～70；Kesslerのコモリグモに関する報告例）もあるので、試しに、同7月19日に雌の飼育箱の中に雄を入れてみた。入れるとすぐ、図のタイプの交接を数秒2回行ったが、初めての観察経験のため、雌が雄を食べている（実際、突起も溝もないはずの背中にかみついているように見えたのだが・・・）のかと思い、飼育箱を振ってしまった。その

後7月22日朝まで同居させたが、お互いに意識しているような気配がないため、無益なストレスを雄クモに与えているかもしれないと考え、元の別の飼育箱に雄を戻した。



雌クモは、7月28日夜卵のうを作ったが、翌日にはすでに穴があり、8月2日までに徐々に卵のうを食べていき、3日朝には卵塊になった。4日にはその卵塊も食べ尽くされた。8日に2度目の卵のうを作り、13日までに卵塊になり、その日のうちに卵塊も完全に食べ尽くされた。受精が成立していないようであり、また佐藤幸子さんより、何度も交接するクモの存在を確認した後、再び交接させることにした。フェロモンのような化学物質の刺激（匂いなど）により、雄クモが雌クモを意識するのなら、箱に移した直後が一番強く刺激され、交接する可能性があり、また前回の失敗から1回の交接では受精が成立しないかもしれないと考え、8月13日から16日までの毎日、交接後、雄クモを元の飼育箱に戻すようにした。13日には入れて50分後に1回、14日には3分後に1回、15日には32分後に3回、16日には1時間半後に1回それぞれ数秒の交接を行った。

ところで雄クモというのは、雌クモに食べられてしまう危険をかかして雌クモに近づき、時には雌クモの気を引くためか、気をそらすためか、エサの贈りものまでするものだと聞いていたが、16日の雄クモの行動は、雌クモの箱の中の餌のヤブ蚊を雌クモより奪い取り、餌を取り返しに近づいた雄と交接した上、彼女を追い払った。こんな奴なら、彼が食べられないように、さらに命のキケンにさらされるという恐怖（？）のストレスに、配慮などするんじやあなかったと思った。実際、この雄クモは雌と交接するとかえって元気になり、食欲まで増すようだった。

さて雌クモは17日に卵のうを作ったので、以後は交接のために雄クモを入れる操作は中止した。今度は穴など開けず守り続け、23日に出のうを見た。子グモは16匹確認したが、大きさに差があり、動きも数も去年より少ない気がした。後に確認したことだが、卵のう内に15~16個の未発生または半発生の卵や胚が残っていた。母クモは最初は子クモにねだられて、そのうち自分の方から積極的に給餌の世話をしているようだった。とにかく餌をよく食べ、鳥の給餌活動のように、子クモの腹部が着色し（後の観察より、食べなくても本来ある程度の着色はするらしいので、これが食べた証拠といえるかどうかはっきりしないが・・・）パンパンになるまで何か（これがスパイダーミルクか？）を与えていた。しかし、25日に、今までと異なる感じの変質した網（彼らの死が原因で網が変質したのかもしれないが・・・）にからまつたようになって、すべての子グモが死んでしまった。彼女は、死んだ、または死にかかっている子に、餌を与えようとしているように見える行為を何回か行った。見ている方がつらくなつて子クモを取り出した。実はこの後再び、雄クモと同居を試みたが、お互いにまったく意識できないようだった。その後、雌クモは餌も捕らず、元気も失い、とうとう28日夕方死亡した。

彼女の死因が子供を失ったための失意のためとは思わないが、結果より見れば、育ちそうもない子供を、無理に産ませるような飼育実験をしたことが、命を縮める結果になったように思えてつらくなつた。しかし、この観察が、いくらかでもクモ達の理解や配慮のヒントになるなら、クモ達の

死も無駄にはならないと思い、書くことにした。
参考文献

吉倉眞（1987）クモの生物学；p.288-290；p.296-297

佐藤幸子（1982）ナニワナンキングモの生活史。Atypus (8)

● 土佐探蛛行(1) 池田博明

土佐の人物で私に親しいのは坂本竜馬・中江兆民・牧野富太郎、そして誰よりも中平清先生である。私は今年、1993年の東京蜘蛛談話会熊野合宿に参加した後で、高知県へ行き、中平先生にお会いする計画を立てた。ついでに蜘蛛も採るつもりだった。この文章の題も中平先生の「梶ガ森探蛛行」にあやかったものである。

乗船の失敗

合宿の3日目、7月26日の早朝、熊野駅発一番列車で宇久井駅へ向かった。東京と高知を結ぶフェリーに宇久井港（那智勝浦）から乗るためである。港は駅から歩いて25分くらいのところにあった。しかし、24日の夜半に四国に上陸した台風4号の影響で東京へ向かったフェリーが中途で避難してしまい、ようやく東京へ着いた頃だそうで、それが戻って来ないという。昨日25日は日曜のため、なんとか会社へ問い合わせの電話をしたのだが、通じなかったのだ。気の毒がったフェリー会社の会社員が車で宇久井駅まで送ってくれた。

宇久井駅からJRで和歌山駅へ、さらに和歌山市駅から南海汽船の高速船で徳島へ渡った。この高速船は和歌山-徳島間がわずか60分、本数も多いし、便利であった。昨晚、大熊千代子氏がシコクアシナガグモを採集するとき、この船を利用したと話しておられたのを思いだした。教訓「船で渡るなら和歌山から」

レンタカーの失敗

徳島市でレンタカーを借りた。船着き場で借りられたのに、市内までバスで行ってしまった。さらに、カローラ・パンなどという大きな車を借りてしまった。途中の梶ガ森付近がどんな道か分からぬので用心したのだが、後で考えると軽乗用車でじゅうぶんであった。料金が倍近く違うのである。それに高知で「乗り捨て」にしたのだが、乗り捨てるにまたお金がかかるのだ。そのことを説明されなかつたので、車を返却したとき仰天した。「乗り捨て料金」のことは料金表に出ていなかつたのだ。別の会社の料金表にはちゃんと出ていた。ただ、この会社のレンタル料は他と比べて高いものではなかつたが、損をしたと思った。いつも軽乗用車に乗っている私としては、乗り心地は良かったが。教訓「レンタカーはいちばん安い車でよい。借りた所へ戻すこと」

雨の梶ガ森

車で梶ガ森に着く数十分前から雨が降ってきた。台風4号が過ぎたと思ったら台風5号が来たのだ。梅雨あけ前の7月にこの直後の6号も含めて3個も台風が上陸したのは初めてとか。土讃線の大田口駅付近のヒノキ林床でナカヒラハエトリを探すが、雨がひどく40分位で中止。車の中で一夜を明かす。雨はどしゃ降りであった。午前2時、サイレンが鳴った。「ダムが放流を始めましたので、川に入らないで下さい」と放送が入った。土砂崩れや、川の増水で車ごと流されたらと不安になつたが、住民がまったく外へ出て来ないので、この程度の大雨は日常茶飯なのだろうと思うことにした。なお、梶ガ森にはむしろ豊永駅から入るべきであった。

バスに乗り損なう

27日の朝になっても雨は降り続いた。梶ガ森での採集はあきらめて、午前5時に高知へ向かった。午前中、高知市内を見学し、車を返却した。中平先生のお宅は春野町である。市内中心部のはりま

や橋で12時21分発「春野町役場行」の高知県交通バスに乗った。前の晚にお電話したときはレンタカーで行くつもりだったので、近くのバス停名「芳原」だけを伺った。春野町方面に行くバスはあまりないので、どれに乗っても同じだろうと思い込んだのが間違いだった。「芳原分岐」という停留所名が出てきたので、あわててそこで降りた。近くの久保田鉄工所の人に聞くと、芳原は水田の向こうの部落だという。住居地図で中平家のだいたいの場所を教えてもらった。さらに途中の農協で聞いてなんとか中平家へたどりついた。バス停から約25分かかった。バス停「芳原」からだと歩いて7分ほどであった。教訓「芳原で下車するには高岡行きに乗るべし」

・博物誌『クモのふるまい』

中平家には消先生と奥様がおられた。台風の当日に来てしまったことをおわびした。76歳になられたという先生はお元気であった。85歳になったときに3冊目の『クモのふるまい』を出版するつもりだという。つまり、『続クモのふるまい』の十年後に当たる。これらの本に書かれたことがらは決してめあたらしい学問ではなく、博物学であると謙遜された。しかし、ほんの小さな記事でも書きとめておけば必要になった学者が日本語を勉強しても必ず読むものだと確信しておられた。私は『クモ生理生態事典』を編集したときに生態記事のほとんどを中平先生の論文に依拠したことを行いました。最近も私は谷川明男氏と一緒にヨツテゴミグモの求愛行動を観察したが、これも既に先生が書いておられた。正確な記録であるがゆえに、私はひとつだけ用語の誤りに気がつくことが出来たが、そのことを申し上げると、先生は先人の間違いを訂正してくれる、こんなに嬉しいことはないと喜んで下さった。

一見、他の人の観察と同じことだと思っても自分が見た記録は大切だし、発表してみる必要がある、そうやって少しずつ真実に近づいていくのである、自分で完全主義をとろうとすると、結局やらないで終わってしまうと思うと話された。例えばスズミグモの道網を見るべく、苦労したが、ちっとも網を張らない、千国安之輔氏の依頼で送ったスズミグモが網室で網を張ったことを伝え聞いたころ、ようやく自分も観察できたという。福本伸男氏の観察もその頃だった。完全に同じではないだろうからと発表を薦めてみると、案の定、三人の記録には違いがあったという。

高知県の珍しいハエトリグモ

ポーダノピッチとブルシンスキーの『日本のハエトリグモ』(1987)には高知県産のクモが6種記録されている。ネコハエトリ1♀(1959年5月6日大野正男採、瀬川), ウデブトハエトリ1♂(1939年7月石川I採、高知市), ナカヒラハエトリ1♀(1965年5月23日中平清採、梶力森), コウライハエトリ2♀2♂(1964年6月24日八木沼健夫採、高知県)と1♂(1964年6月24日中平採、高知市), マダラスジハエトリ♂(1965年6月12日八木沼採、高知県), トサハエトリ3♂(1964年6月28日八木沼採、高知県)である。このうちウデブトハエトリ♂はキレワハエトリのみと判断されて記載されているが、これは明らかに間違いであるし、石川Iは石川重治郎、八木沼採と記録されている高知の標本の採集者は中平清である(八木沼, 1988)。このうちナカヒラハエトリ, トサハエトリは新種で、コウライハエトリは新記録種である。これら3種はこの記載以来、日本では一度も採集されていない。タイプ標本がポーランドにあり、八木沼氏が貸した分の標本をいまだ返却して來ないため、相当するものが分からぬのである。しかし、記載文があり、全形図はないが、生殖器官の図はあるのだから、模式標本の産地で同じだと思われるハエトリを探ればいいわけである。この3種について特徴と模式産地を解説しておく。

ナカヒラハエトリ *Harmochirus kochiensis* は雄1頭で新種記載された。キレワハエトリに大変よく似ていて、特に雌では区別が困難と思われる。中平先生の記録には外雌器の図や「ハエトリにしては毛が少ない」と書かれている。模式産地は梶力森だが、本種の雄と推察される個体は日本各地で発見されている。

トサハエトリとコウライハエトリの正しい産地は「高知県幡多郡大方町入野」の松原である（中平氏による）。

トサハエトリ Tasa nipponica は新属新種である。雌は未発見で、雄の体長は4mm程度、第1脚が最も長く(3.3mm)、続いて第4脚が長い(3.2mm)。頭胸部は明るい褐色で金属光沢を持ち、I眼列上に少し白毛と黄刺がある。腹背は暗灰色で黒っぽい矢はず模様があり、腹部側面には黄色の点が線状に並ぶが、大型個体ほど明るい。この属の記載種は2種だけだが、触肢には特徴があり、脛節突起の基部に鋸状の歯がある(Wesolowska, 1981b)。

コウライハエトリ Pseudicius koreanus はウェソロウスカが1981年に北朝鮮から雌だけで新種記載した種(Wesolowska, 1981a)。雌の体長は4.7mm、雄の体長は3.4~4.3mm。北朝鮮産のタイプ標本と日本産の標本では外雌器が異なって見える。ボーダノビッチらは、これは図の描き方の違いによるものだろうが、新しい標本で再確認する必要があると言っている。

色彩多型種

中平先生の『続クモのふるまい』に色彩多型種カメンヒメグモのことが出て来る。このクモの正体はキヒメグモであると私は思う。記録ファイルを見せていただいたが、久保寺みかと私が報告するずっと以前に中平先生は詳しい記録を取っておられた。先生には有名なイオウイロハシリグモの研究がある。別種とされていたハシリグモ数種が、実はイオウイロハシリグモの色彩変異であったことを証明した論文は、日本語であるが、外国のクモ研究者がよく引用している。

ヤマシロオニグモの生態研究を私の娘がしていることをお話しすると、行動観察を主にすると荷が重いのではないか、色彩多型を調べてみてはどうかと助言して下さった。ヤマシロオニグモの型は遺伝的に決まるものだというのが、先生の直感である。同一地域で各型の占有率を調べたり、卵のうから出る幼体を飼育すれば間接的ながら証拠は集まるはずである。

他にも先生からたくさんのお話しを伺い、飼育中のアマミサソリモドキを見せていただき、「何事もあせらずに。ひとつのことでも9年から10年はかかります」と励まされた私は、ハエトリの採集ばかりではなく、高知県の大自然を楽しむために「また高知へ来よう」と思うのであった。

深夜バスが安い

28日も台風の南方の低気圧のせいで朝から雨が降ったり止んだりだった。四国中央部は雨続きで土讃線は朝から運転中止、南へ行く土佐線も須崎付近で線路が水につかり、運転中止となった。そこで、雨が降っても可能な高知市内見物に切りかえて、筆山と牧野植物園(五台山)へ行った。どちらも市街地の公園としては大規模であった。驚いたことに筆山は全山、共同墓地であった。

電車は夕方になっても運転していなかった。高知と東京を結ぶ深夜バスに乗ると翌朝、東京駅に着く。そこから出勤して、ちょうど間にあった。深夜バスは眠れないものの、料金が安い。次の機会には往復バスを利用しようと決意し、私は次の日程を計画し始めた。

参考文献

- Bohdanowicz, A and J. Proszynski, 1987. Systematic studies on East Palaearctic Salticidae (Araneae), IV. Salticidae of Japan. Ann. Zool. 41(2):43-151.
- 池田博明, 1988. クモ生理生態事典.著者自刊.
- 久保寺みか・池田博明, 1989. キヒメグモの色彩多型. Kishidaia, (59):1-4.
- 中平清, 1983. クモのふるまい.著者自刊.
- 中平清, 1991. 続クモのふるまい.著者自刊.
- Wesolowska, W. 1981a. Salticidae (Aranei) from North Korea, China and Mongolia. Ann. Zool. 36 (3):45-83.
- Wesolowska, W. 1981b. Redescriptions of the E. SCHENKEL's East Asiatic Salticidae (Aranei). Ann. Zool. 36(7):127-159.
- 八木沼健夫, 1988. ボーダノビチ, ブルシンスキ著「日本のハエトリグモ」について. Atypus, (9 2):1-7.

続中国紀行 1

中国から帰ってしばらく、私はボーッツとしていた。日本のせかせかとした生活のベースに合わないのである。それでも1カ月も経つと、やはり日本働き蜂の一員になってしまい、せかせかと働いてしまう。「あの世界」を見てしまったので、なんだかおかしいと思いながらも。

ある日、西川さんから電話。もう一度中国に行かないかという誘いである。二つ返事でOK！クモ仲間の田中さんを誘って、9月の上旬にクモの採集に行くことにした。今度は中国南部、広西省の歴史都市・桂林である。ここには、春の遠征でお世話になった中国のメンバーが勤務している岩溶地質研究所があるので。

やっぱりトラブル！

キャセイ・パシフィックで香港に。珍しく定刻通りに着陸したなと思ったら、香港は嵐。桂林に行くはずのドラゴン航空の飛行機がこない。「西川さんと乗るといつもこれだ！」「いやいや吉田さんが悪い！」と言い合いをしていたら、田中さんがぼつり。「2人ともトラブル・メーカーなんじゃないの？」

こんなこともあるうかと、時間つぶしにおもむろに「宿題」を広げる。岩溶地質研究所との契約書（英文）の作成である。春の遠征の時は、これを作るのに学生たちは数ヶ月をかけたようだ。契約の内容でもめたのである。

ビジネス・ビジネス！

日本人相手だと、彼らは色めき立つ。たとえ貧乏学生といえども、金余り国の一員だ。ぽろい儲けになりそうだ、と思ったらしい。宿泊・案内・現地との交渉・中国国内での移動に関する費用はみんな向こう持ちであるが、そのかわり日本側は一日・一人あたり50ドルを払えときた。当時円は安かったから、約1万5000円で、中国人の二ヶ月分の給料である。

私たちのような給料取りにとっては、1週間や10日であればむちゃくちゃ高いものではないが、学生の身で二ヶ月分というとかなりの額である。これを値引きさせようと交渉したら、ある日わが家に国際電話がかかってきて、英語でまくしたてられ、閉口した。結局春は一日45ドルにしてもらったが。

当初はこちらがそんなに貧乏だということが分からなかつたらしく、車を2台（日産ローレルとランドクルーザーと指定してきた）くれとか、さまざまな物件を要求してきた。このがめつさには、大阪商人も遠くおよばない。

まあとにかく、いろいろともめたあげく、お互にどの程度要求できるか分かってきたので、今回は気楽である。3人とも給料取りだから、50ドルで仕方あるまい。前回の契約書を大幅に削って簡略にし、費用、お互いの義務、保険、通訳等々に関する文章を作るのに3時間。やっと飛行機がやってきた。

夜遅く桂林についた。小さな空港で、荷物を運ぶベルト・コンベアーもない。岩溶地質研究所の宿舎で一泊。翌朝、契約書の案を示し、基本的に合意。タイプするのに一日かかると言うので、市内観光に出る。

文化都市・桂林は（中国としては）こぎれいな町並みで、乞食もおらず、人々も裕福そうである。郊外の景観は、さながら水墨画の世界であり、孫悟空が出てきそうな山々が点在している。ただし、山々は思ったよりはるかに小さく、高さは50-200mくらいか？

この辺は広大な石灰岩地帯で、その面積は日本の3倍はあるという。石灰岩は侵食され、硬い部分があちこちに残って山となつたのだろう。そして、水の流れた後が洞窟として多数残っている。

芦笛岩（「岩」とは洞窟を意味する）という桂林最大の観光洞はすばらしいもので、洞窟の内部は、これ以上侵食されたら崩れそうな、極限の造形美を醸し出していた。

公園にて

市内の七星公園にはさまざまな売店や小さいながら動物園もある。公園の敷地内にいくつかの山があり、森林もいくらか残っている。洞窟も5つほどあるらしい。

ベンチで休んでいたら、猿の群れに囲まれびっくり。野生のものである。「ミョーーー」と変な声で鳴く虫は蟬らしい。やや湿った場所には親指ほどの太さのヤスデが多数。西川さんによれば、「万年筆ヤスデ」だという。

売店でジュースを買い、女の子とおしゃべり。日本語がうまい。独学で勉強したそうな。私の持っている中国語会話の本と彼女の持っている日本語会話の本を交換してくれという。

同行していた通訳の王女史は、損だからやめろと言う。私の本は600円、彼女の本はぼろぼろで定価は日本円で数十円。でも、女の子にやさしいおじさんは、ついつい交換してしまう。

私の知っている中国語は、ニーハオ、ツァイツェン（さよなら）、ブーアオ（いらない！）、メイヨウ（ない！）、ウオアイニィーだけだと言ったら、「それ、いけないよ」と睨まれた。

中国はさすがにお堅い。戯れにそんなことを言ってはいけないのかと思った。しかしまあ、キオスクのおばちゃんが、日刊スポーツを買いに来たおっさんにいきなり「好きだよ」と言わされたら、おんなじ反応をするのかもしれない！？

しかし、ドイツ語(Ich liebe dich)でも中国語でも、なぜめったに使わない文を教師は教えるのだろう？頻繁に使ったらあっちこっちで問題が起こるではないか！

クモタケ一齊調査の御礼

新海 明

今年(1993年)の6月から7月にかけて実施しました、冬虫夏草の一種クモタケの全国一齊調査に際しましては会員の皆様からたくさん回答をいただき誠に有難うございました。調査地点は150箇所以上にのぼり、今まで分布が確認されていなかった四国や日本海側での分布が確認されたり、北限が埼玉県の北部まで延びたことなど多くの成果をあげることができました。調査結果は現在整理中ですが、まとまり次第に談話会のKISHIDAI Aまたは通信に御報告いたしますので御覧ください。

来年以降も継続して調査をする予定ですので、調査計画やアンケートの取りかたの不備などについて御意見や御感想などありましたら遠慮なくお聞かせ願えれば幸いです。

今後も一層の御支援と御協力をお願い致します。

KISHIDAI Aの発行の遅れのおわび

KISHIDAI A 65号は既に4月に印刷所に入稿していますが、印刷所の事情からまだ校正も上がってこない現状です。印刷所を変更することも含めて、目下打開策を検討中です。

原稿をお寄せ下さったみなさまにおわび申し上げます。もう少しお待ち下さい。

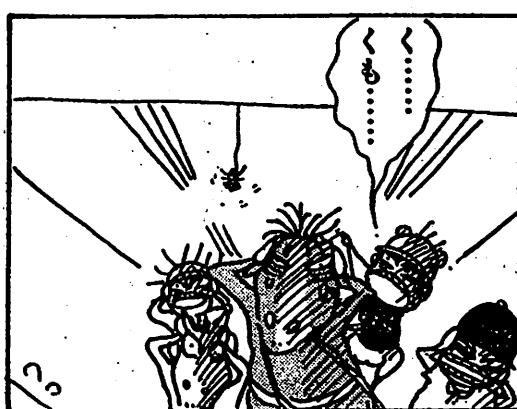
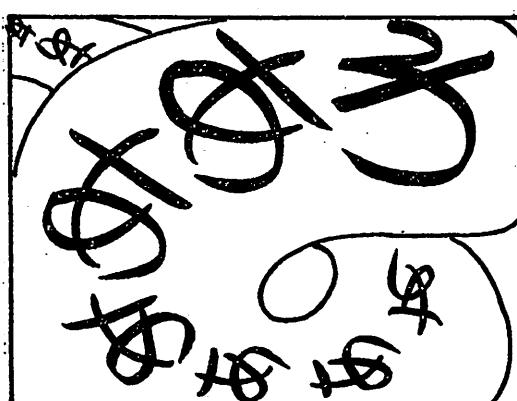
編集部からのお知らせ 原稿をお待ちしています。

□ 会誌編集；〒248 神奈川県鎌倉市七里ガ浜東2-3-1 七里ガ浜高校 谷川明男

□ 通信編集；〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099 池田博明

おどろきももの書おうまのき

小道迷子作



ピックミックスピリッツ 14巻24号

△提供・高橋祐子さん



小野辰嗣訳

定価1,100円 本体1,068円

岩波書店発行「クローズアップ図鑑」10月5日
刊行開始。小野さんが②③ほかを翻訳していく
す(池田)。

2 砂漠の生きもの
砂漠を大群で移動するバッタ、ビ
の虫針でえののを殺すサソリほか、
サボテン、ヘビ、ゴミムシ等、乾
燥地に適応した生物の暮らし。

115312-2 C8645

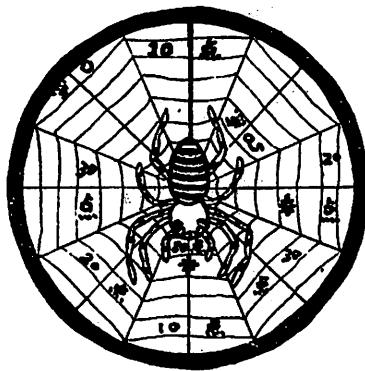
続刊の構成

③熱帯雨林の生きもの
④川の生きもの
⑤草原の生きもの
⑥樹木上の生きもの
⑦だまりの生きもの
⑧海の生きもの
⑨湿地の生きもの
⑩森の生きもの
⑪どうくつの生きもの
⑫貝の生きもの

▼第2回配本／第3・4冊は11月5日発売の予定。
以後毎月2冊ずつ刊行予定。
[名番分譲]

おすすめ 東京書籍から出ている
『ザ・サイエンス・ヴィジュアル』の中の最
新刊、『進化』は写真絵本(大人
向き)として、傑作です。その他、DK
社発行の本は日本では同朋舎や
岩波書店から翻訳が出ています
(池田)

命かけの転職



東久留米市・吉田喜好 26
ダーツ、弓、それとも射撃のターゲットか? いずれにしても、大変な職業を選んだもの。今回の応募作の中で異色の転職=5級

1993年9月27日 読売新聞
首都圏ひびる⑩流MAN画塾
より
テーマ"ムシの転職"入選作品から
3点

会費振込先

東京7-74885

東京蜘蛛談話会

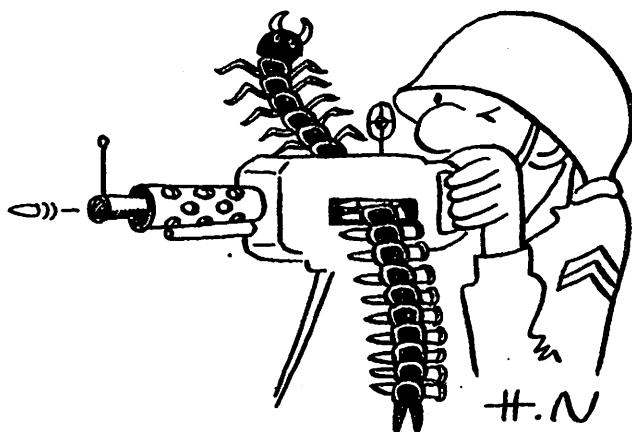
(前と
同じ
です)

本部; 小野展嗣

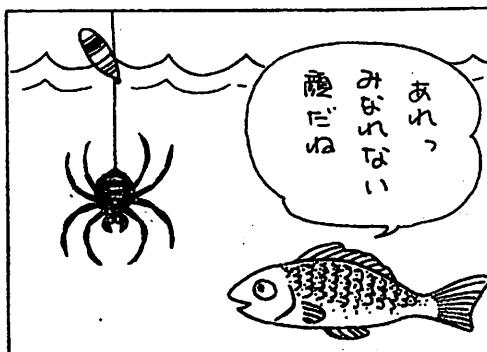
事務局・会計代行; 谷川明男

4~9月9間

に入会された
方、会費を
振り込まれ
た方の名は
は、次号に
お知らせし
ます。
御安心下さい。



昭島市・中島弘秋 60
あって欲しい職業だが、これまんがな
なくては出来ない表現。ムカデの特徴を聞くと、
えている=3級



練馬区・大平君江 31
絵がきれい。しっかりと描きこんでいるが、職業で
見やすい、というテクニックの見本。驚いた魚の表
情もいい。<家元特選>=初段

同封ハガキの記入法(裏)

○ 合同例会に
(出席、欠席) はす

○ 講演
(有、無)
演題

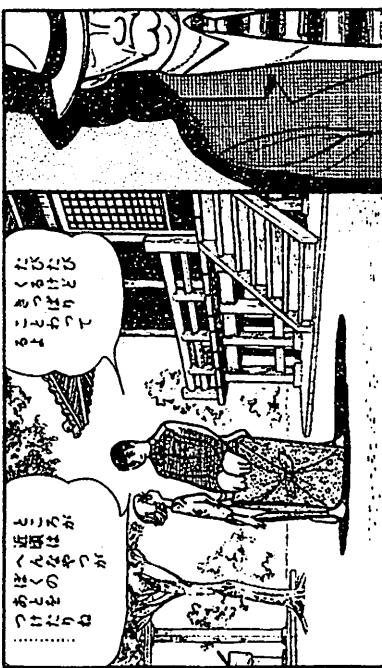
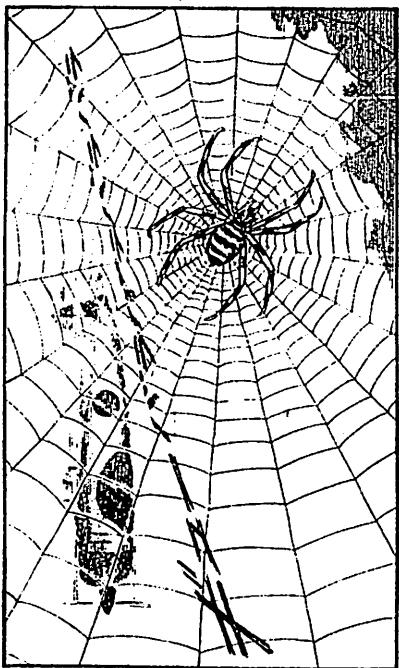
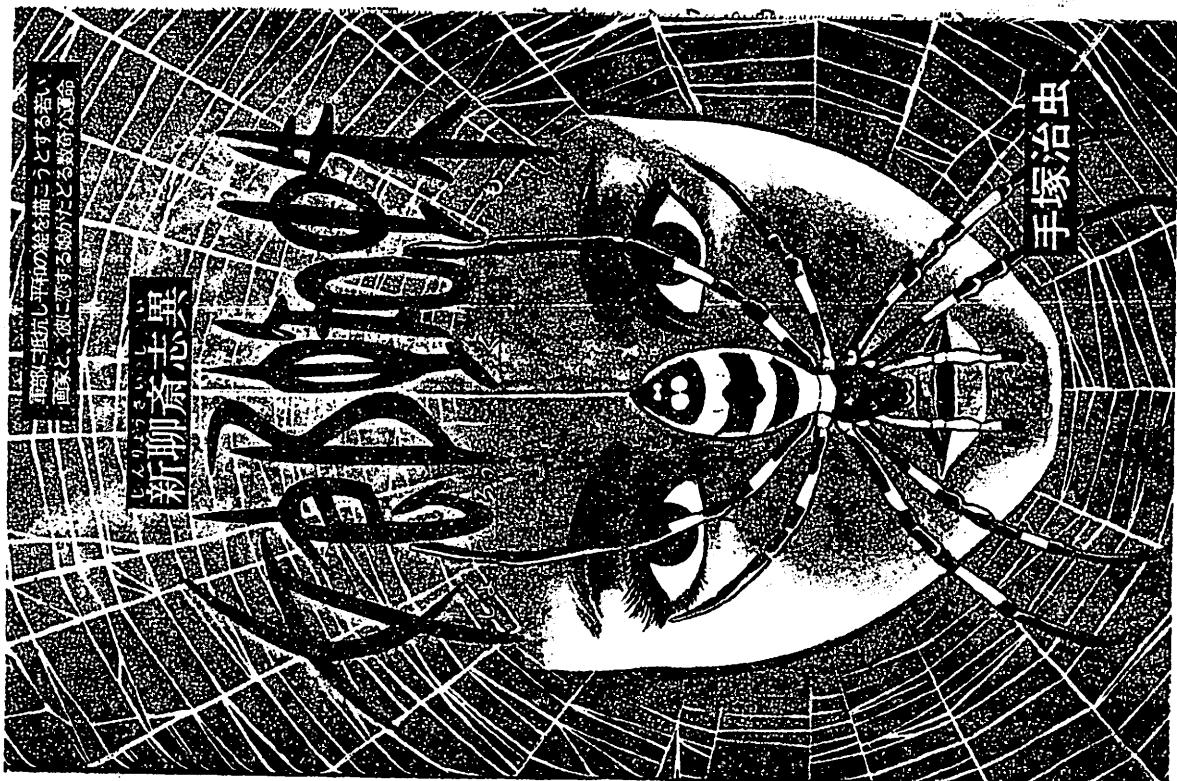
○ 住所、氏名

近況



次号は、七里ヶ浜高
校 谷川明男まで!

手塚治虫



自然観察講座

クモを動かす楽しみ



池田 博明



「トリノフンダマシがいたよ！」と子どもが叫ぶ。みんなが色々な方向から集まってくる。

「どこにいるの」「この葉の裏。おかしな形だね」

「よく見つけたね」

発見した子どもはちょっと照れながらも得意そうだ。夏の自然観察会の一コマである。トリノフンダマシは夜間に大きな網を張り出すクモだが、昼間は葉陰でじっとしている。鳥のフンにそっくりなため見つけにくい。



クモの観察は面白い。だいいち、身近な所にたくさんいる。人家の垣根で7月中旬に調べてみた。わずか3m幅の垣根に8種類のクモが見つかった。街中でも年間を通すと、楽に50種は見つけることができる。

樹上から下草まで、色々なクモがいるので、クモの観察会では2時間かかる出発点から50mそこそこ移動しただけだったという記録があるくらいだ。子どもは視点が低いので、足元の小さなクモをよく見かける。それがまた貴重な種類だったりする。

種類や数の多さばかりではない。それぞれの種

が独自の糸の使い方をしていることや、生活の多様さも面白い。きちんと調べられた種が少ないので小さな観察でも新発見のものが多い。

さらに、クモには羽がないので逃げないことが好都合だ。特に網にいるクモは動かないから、みんなで観察するのに絶好である。発見者が声をかけて全員が集合するまで、網のまん中でちゃんと待っていてくれる。

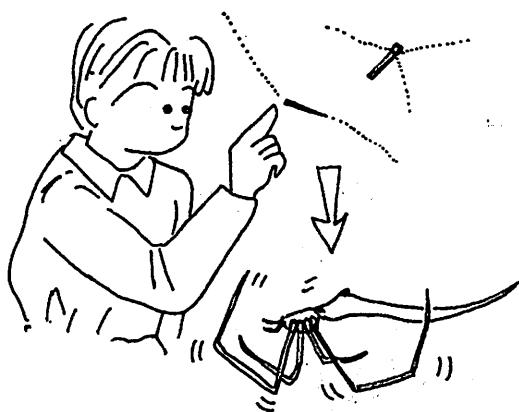
珍しい種類をさがそうとすると、すぐに行きづまってしまう。そこで、身近な種の観察の方がお薦めである。ただ見るだけではなく、この動かないクモを動かす楽しみから始めてみたい。

1. 指でふれる

やり方は簡単。指さきでクモの体にそっとふれるだけ。ふれられてかみつくようなクモはないし、日本には毒クモもないから安心だ。

中空に浮いている枯れ枝や松葉が急に動き出したら誰でも驚く。その正体はマネキグモやオナガグモなのだ。

ふれたときのクモの反応は色々である。網をゆすって、震えるもの（ジョロウグモの幼体やユウレイグモ）、ポトリと落ちるもの（オオヒメグモ）、ハネて落ちるもの（コガタコガネグモ）など。落ちたときも、お尻から糸を引いているので、しばらくするとまた上がってくる。網を食べて回収するクモもいるくらいだから、せっかく作った網を捨てきれないのだろう。急な落下は狩りバチに対する防御の反応かもしれない。



2. エサとなる虫をかける

網に虫をかけると、クモは様々な捕獲戦術を見てくれる。最初にかみつくもの（ショロウグモ）、糸でからげるものの（オニグモなど）、遠まきにして周囲から糸をかけていくもの（クサグモやコクサグモ）、後脚で糸を投げかけるもの（ヒメグモの仲間）など、多彩だ。網にクモがない場合でも虫をかけると隠れ家からクモが出てくる。ただし、虫が死んでいるとほとんどのクモは反応しない。

同じクモでも、虫の違いで反応が異なる場合がある。小形のクモでは、大形の虫には最初に攻撃してみるだけで、退散してしまうことがある。小さなハチをかけると、ハチがクモを刺すこともある。刺されたクモはそのハチには二度と近づこうとしない。かかった網から体をねじって脱出してしまった虫も多く、虫の逃げ方に注目してみるのも面白い。

3. 他の網のクモを入れる

クモの網は一種のなわばりである。そこに同種の別の個体を侵入させると、争いが起きる。フィルムケースに網のクモを取り、同種の別の網に入れてやる。そうすると先にいたクモと後で侵入させたクモの間で網の取り合いが起こる。勝負は糸を引くだけで一瞬にして決着することもあり、脚と脚を打ち合ったり、取っ組み合ったりすることもある。争い方は2匹の大きさの差によっても違

うし、種類によっても違いがある。

4. クモ合戦

鹿児島県の加治木町の夏のコガネグモのクモ合戦は有名だ。しかし、棒上でのメス同士の闘いは自然界で起こっているものではないだろう。クモ合戦には「ホンチ遊び」といわれたネコハエトリのオス同士を闘わせるものがある。房総や横浜で4月下旬から5月上旬にかけて、子どもたちが熱中した遊びである。これはメスを争うオスの闘いで、腕を大きく振り上げる勇壮さが感動的である。ハエトリグモは網を作らずに、歩き回ってハエを取っている。目の配列に特徴があって分かりやすい。ネコハエトリに限らず、ハエトリグモのオス同士を見合わせると、大なり小なりクモ合戦を楽しむことができる。うまく闘わせるコツは思い切って2枚のパルサ板(10cm四方)にクモをのせ、2匹を正面から出会うようにしてやることである。チャスジハエトリのオスのように激しく跳び回る種類では無理だが、秋にはオスクロハエトリなどが結構面白い。一度負けたクモは戦意を無くすので、少し小さいクモと見合させて自信を取り戻させる。

触肢に生殖器官の発達したオスの成体は種によって決まった時季にしか見つからないので、日本ではあまり研究されていない分野である。

5. クモは器用な役者

クモはどこにでもいる。自然観察の主役としてもわき役としても十分使える役者である。鳥や昆虫との関係も密接だ。面白い話は『クモのはなし』I・II(技報堂出版)に挙げられている。クモの名前は知っている人に聞くのが確実だが、調べるには『クモ基本50』(森林書房)や『フィールド図鑑クモ』(東海大学出版会)が手ごろだ。

クモの生活に興味をもつ人が増えることを願って普及に尽力している今日この頃である。

この貢るい「年賀蜘蛛」
毎回や進み提供

▷1992.12.23 台湾日報(西)

▷1993.9.17(土) 每三新聞(朝刊)

◆N.Y.N.Y.S. 蜘
子のやくはホリの出で女
性の頭の上に載せら回してし
る。米國の中華裔の理科教
師・ベーベル・チーフさん
はうそらの動画を。「蜘蛛
がめりたりとつまむ」とい
生徒たちの前で自ら実験を行
なった。先生が蜘蛛の手
足を1000倍の速さで見せてお
り、「N.Y.N.Y.S.の頭の「お
気に入り」だ。彼女の
妻が蜘蛛が「お気に入り
である」と尋ねたので
ある。=導入部

▲美ほうをドク占
クモなく当選?

■ 金儀公司 ■

(M) MOTOROLA

「鐵頭蠍王」・極機種快

收斂自如的通訊
尖兵 MICRO T.A.C. 開先 1950

「他」不但收發自如、卻又機動敏銳。
雖然體薄短小、卻擅長見機行動。
具備捕快性格、又不失行動風範。
靈活掌握先機、實在令人佩服。

● MICRO T.A.C. 麥克1950身著全
黑磨砂外衣、顯現著LED紅
色字幕、透露訊號及音量強度
• 身懷32組電話號碼記憶及自動
上鎖等各種功能，與您個人
的氣勢，相得益彰。

MOTOROLA
麥克 1950
MICRO T.A.C.
圓袋型 隨身電話

MOTOROLA 授權代理
金儀股份有限公司
總公司：台北市信義路五段2號13樓。電話：(02)3458018

私の故郷の佐賀地方では、朝のクモは仇に似て、夜のクモは親に似て、ともいわれた。夜のクモは親に似て、朝のクモは仇だといつてお殺せ」ところで、いふべきがある。今日ではおなじく、いふべきがある。今日はおなじく、子供の私は祖母や母たちから脚がされても信じたものだった。だが、この風に思はれては佐賀地方だけではなくて、今、モ学者の吉良民氏の著書「クモの不思議」とよんで、同じじめんなひが各地で回られて、いたらしい。

れいと田口このは歐米では日本と逆で、朝のクモは蟻越が悪く、夜のクモは蟻越が良いことに気が付いていたところ。誰が實り出したか知らないが、いが勿論そんなどはないのだが、クモのクロマテスクな姿、ねばねばし

△ 小野展嗣氏 提供

戸川 幸夫



忍者ハエトリグモ

インセクタリウム, 30(4):37
NEWS 1993
昆虫園ニュース

オオツチグモの死

1988年の生態園オープン当初は
9匹いたオオツチグモも、最後の
1匹が2月17日に死亡してしま
いました。飼育期間は約5年でした。
寿命なのかどうかはよくわかりま
せんが、昆虫類と比較するとずい
ぶん長生きです。昆虫愛好会の見
学会のときはアイドル的存在(?)
だったのに、2月の愛好会での皆
さんとの対面が最後になってしま
いました。

飼育個体はメスのみだったので不思議に思っていたのですが、オスは体が小さいために輸送に耐えられず、日本到着時にはメスしか生き残っていないのです。

5年間飼ってみて気づいたことは、サソリと違って一生脱皮を繰り返すことです。年に2～3回は脱皮をしていました。熱帯雨林に生息しているためなのか、乾燥に大変弱く、飼育水槽内はかなり多湿にしなければなりません。土を掘って穴の中に潜むため、展示の難しい種類でした。（細井文雄）

自然はだれのものか

小野展嗣

初夏になると尾瀬がにぎわう。私にはこれがよくわからない。不思議である。たしかに尾瀬の自然はすばらしい。しかしながらそこに大型の観光バスが何十台も到着して、大勢の人が、自分の前を歩く人の背中をながめながら、黙々と木道の上を歩かなければならぬのか。心ないハイカーの捨てるゴミや、有機物汚染も深刻らしい。あれだけ人が集まれば当然の結果であろう。それに対して保護の問題が議論されているが、私にはどうも尾瀬の景観を守るためにということに終始しているように思われる。もし自然に水の流れが変わり、雨量や気温が変わり、湿原が干上ったときは……。

鳥取砂丘では、波による侵食や風の影響で砂丘の形態が自然に変化する。水が湧き出したところは草原になってしまふ。それに対して地元では、砂丘の保護のため、砂を運んだり、草をブルドーザーで抜くのに大きな労力をかけている。自然を保護するはどうすることか。もし人間の所為が加わらないものを自然というなら話は簡単であろう。人間が退けばそこが自然になる。そうではなくて、自然とはあくまで人間社会との関係のうえに成り立っているある価値をもった総体なのである。ではその価値をどうやって計るのか。

話を尾瀬に戻して、尾瀬の自然の価値はどのくらいであるのか。これに答えられない限り、尾瀬の自然に人間がどのように接したらよいかという問い合わせにも答えは出ないのである。年配の人は昔は良かったとい

う。尾瀬に行く人間が少なかったからである。しかし、その良い印象が波紋のように人に広がって、今のようになったのである。では土地を囲って、1日入場者100人までなどとすれば良いのか。そう主張する人がいれば、それは自然を見世物小屋と同じ次元で考えているんじゃない不見識である。尾瀬の生物についていいたいどれだけのことがわかっているのだろうか。私が研究しているクモ類についての記録はひじょうに少なく、何種類のクモが生息しているか、そのうちどの種が湿原に特有のものか、個体数は、種として保護すべきものがあるか、こうした疑問にはまったく答えられない。ちゃんと調査すれば新種も見つかるだろう。

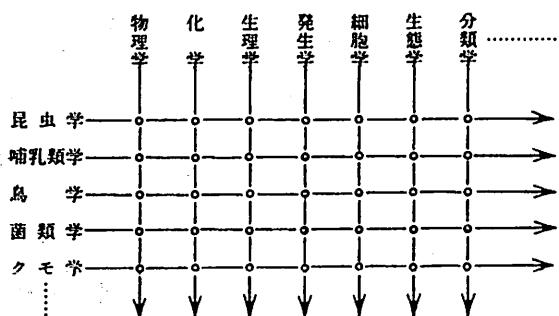
自然破壊の元凶とされるゴルフ場の問題も然り。なぜわが国にこんなにたくさんのゴルフ場がなければならないのか。そしてなぜ猫も杓子もゴルフをしなければならないのか。一つの側面は、ゴルフにはお金がかかるのである。高額の会員権、道具、ファンション。地元では、多くの人に雇用の機会が提供され、地域振興につながるので、ゴルフ場建設に賛成の人も多い。巨額を投資して採算をとるには、たくさん的人がゴルフをしなければならない。スポーツというよりは一種のブランド指向をくすぐる。経済優先の原理がはたらく。彼らは問う。ではゴルフ場にしない場合のその雑木林の価値は？

おととし、ニューヨーク郊外に住む義弟の家を訪ねた。小さな町だが、町のまわりが公園になってい

てパブリックのゴルフ場がある。いつでも誰でもゴルフを楽しむことができ、費用はわずか15ドル。老若男女、近くに住んでいてスポーツとしてゴルフをしたい人だけがゴルフを楽しんでいるのである。ゴルフをする人としない人の人口のバランスが保たれている。ゴルフをする人も楽しんでいるし、しない人にも迷惑はかかるない。日本ではどうか。会社の接待、ビジネスマンのたしなみ、過剰な宣伝広告。会員権は数千万円の単位、ビジターだと1日数万円の費用がかかる。スポーツとしてゴルフをするには法外な金がかかり、ゴルフをしない人には過剰なゴルフ場建設による自然破壊が起こってみたいへんな迷惑となる。わが国では何かがおかしい。

大挙して尾瀬を歩くのも、つきあいでゴルフをするのも同じ動機からではないだろうか。ある心理学者は、日本人は皆が行くので私も行くという単純なモチーフで行動し、自分が異質であることを嫌う、と述べている。どうも世界でもっとも嫉妬深い民族と思われているらしい。自然愛好も一種のブームになっている。4WDの大型ジープで海や山へ行く。舗装された道路、トイレや風呂のあるキャンプ場も整備され、アウトドア商品が売れに売れている。人が集まるところ必ず経済優先の原理がはたらく。

これから時代は、自然の価値が常に問われるようになるだろう。人間同士の利害がからむ。また国際的な認識の違いも出てくる。種の多様性の問題にしても、遺伝子の完璧な保存技術が開発され、すべての種の遺伝子が永久に保存できるようになったとき、との生物の生きた個体は必要ないのか、というような問い合わせが真顔でなされるようになっている。自然の主体である動植物の価値を普遍的に判断する基準はないのか。私はナチュラルヒストリーこそその役割を担っている学問領域であろうと思っている。自然とは遺伝子とか種とかいう以前に、あらゆる生物が複雑に関係をもち合った一つの集合体だからである。

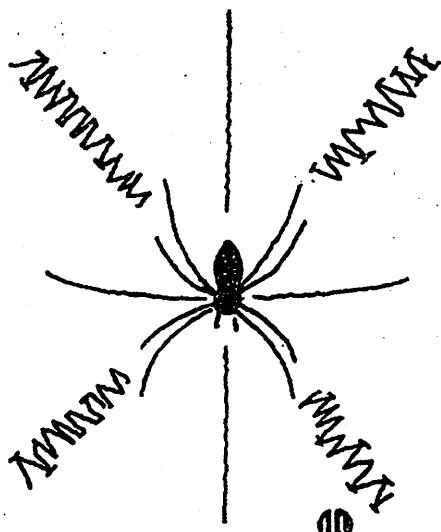


ナチュラルヒストリーの網。

最近、ナチュラルヒストリー（自然史）の復権が呼ばれている。しかしこれからのナチュラルヒストリーは、かつての“博物学”とは異質なものであり、生物を認識するうえでの総合領域としてきわめて重要な役割を演ずるものと思われる。生理学、細胞学、生態学などをタテ方向の学問分野とすると、昆虫学、哺乳類学、菌類学といった分野はヨコ方向に展開する。ナチュラルヒストリーは、こうしたヨコ方向の学問を総合し、生物社会を多面的に理解することができる。つまり網の目のようにからみ合った科学の領域の上で、ナチュラルヒストリーは、あらゆるタテ方向の分野と接点をもつてゐるといえる（上図）。そして、その担い手は言うまでもなくこれからの子どもたちであり、学校教育に大いに期待がかかる。

最近、昆虫採集をしたことがない子どもがふえている。当り前の話で、都会には虫らしい虫はほとんど見つからない。だからといって、昆虫採集を奨励し、50人の子どもたちが、列をつくって野山で捕虫網をふる姿をみると私はぞつとする。虫捕りは一人、二人で楽しむものだと思う。それよりも、地球上には多様な環境があって、多様な生物がいて、その上に人間が住んでいることを総合的に理解できればよいのではないか。そして、皆が尾瀬へ行き、皆が北海道でラベンダーの花を見、皆が沖縄のサンゴ礁にもぐり、皆がスキーやゴルフをする必要はないのだということも……。

(おのひろつぐ、国立科学博物館 動物研究部)



V22

博物 ばなし

絵と文 串田 孫一

英語の蜘蛛

雨天の日の多かった夏の間は、蜘蛛の姿も網もほとんど見掛けなかったが、秋になって日の差す日がまじむようになると、昆虫も急に多くなり、それを細つ蜘蛛も網を張りはじめた。つい見て也不要なって捨てられた網は、掃除の際にまづいながら、出来上がったばかりの見事なもののは、たとえそれが玄関先であってもそのままにしてある。リバート・ランシングというのは多分和製英語だと思うが、それをすこし現れた人が、「上を述べながら持っていた傘で払おうとしたので、腕を抑えた」ともあつた。

私はこの数日、草むらの低いところに、収口に付けていた網の中心にため込んで

一クモと遊び

蜘蛛の習性について書いてある本を読んでいたが、その本によると、蜘蛛は、網を作ったナガコガネクモと付書き合いでいる。その中心に雄が一匹だけ、左右八本の脚を一本ずつしているが、左の脚は、右の脚は、どちらかとも言へない。その脚が、ちょっと伸びていて、蜘蛛の頭にまづいながら、出る。

蜘蛛の習性について書いてある本によると、それが玄関先であってもそのままにしてある。リバート・ランシングというのが分からなかったが、擬態の一種で「かくれ袋」という名前もあり、それが蜘蛛の種類によってさまざまである。蚊取線香のような渦巻を作るは、ウツゲキ、自分の食べかすや糞を回すようにして、飛ひついて来るが、獲物でないと分かるとX型の中央に戻る。また細い草の先を顔の正面へ持つて行くと、まるで猿が金網を振りますように、激しく動かす。だがこれはかなりしつこく遊ぼうとする私の怒りかもしれない。なんだ怖くなつてきた。この一文も彼には内訳であった。

(エッセイスト)

でいるのは「クモ」という眞命に。

【蜘蛛の研究】といふ本を一九三一年に遺稿として出版した湯原清次氏は二十五歳で亡くなった蜘蛛の学者であるが、白帯などといわれていたことを学んだ。子供たちはこれを見て、この蜘蛛は英語を書くとも書いていたらしく、

私はけんじほい草むらでナガコガネクモと遊んだ。枯葉を小さく引きつけたりぬかし、飛びついて来る

東京新聞(夕刊)

小野展嗣氏
提供

梅林初の
提携

1979.8.23

書道 畫廊

尾門



梅林の筆で描かれた
中村義定。この
「トニー」の真
面相

墨江の筆で描かれた
人物
の頭

らが描かれる。

使われる墨や

は「カネクモ」

メバ。女郎がモ

と書かれる。本

墨江が好んである

大型だ。墨か

い墨川本の墨

で描かれたのが走

ってゐる。とて

もアーチャスな

キャラクターであ

＜田遊び＞③

——クセ——

クセを聞いた遊びもある。毎

年夏祭りは墨江田遊びのくじや

くじ引いた。引いたのは、田遊び

の遊び出でや遊びの遊びで始

めた墨江の墨江公が、遊びに

遊びを附けて、墨江の子供を

遊ばせたとおひげ、ほかだと

いふ。今でも毎年の年中行事

として残っている。毎年、夏の

墨江田遊びの日

グラマー、一本橋の決闘 島津公が発案の加治木クモ合戦



▲「カネクモ」の筆(原作日本画)
株式大國璽(かい)

のホーター連から先達と大
戦場。やがてロシットになつて
かねだにロシットに糸を巻かれた
糸を巻いて、機知を發した
ヒットを左手に回りで投げた。
のどねおにのれんヒョコーは

遊びの博物館



遊ばせた墨江のくじで始めた。
墨江田遊びは、墨江の遊び
の遊びの遊び(くじ)。ホーター
平田をコンクトにむかひ、二つ
手もサシナガがなくなりて組
みつかせやう。その結果、
ホーター連が、大戦場となりた。
先づく機知の方を、次づくは
人の手ぐるせと勝てるので
「やるな」と叫び、墨江田遊び
の遊び出でと勝てるので、
遊びを附けて、墨江の子供を
遊ばせたとおひげ、ほかだと
いふ。今でも毎年の年中行事
として残っている。毎年、夏の
墨江田遊びの日

になると十数回、墨江

の

墨江

田遊び

の

田遊び

</

1991年(平成3年)12月25日 水曜日

文

化

▽新海明氏 撮影



新海明氏

1992.6.22 研究会 内
新海明氏 撮影
△一ノ矢木 たのが由来 考古学的
クモを闇に 先駆者として「匠の技」
せ 番號王立 手のひらにわざる力の
を表す新種 重なるふくらみ、握り拳
「王立羅」 しづくを意味する。
の四百周年記念大祭典 △ 遺跡の発見と研究
十一日、東京電機大学 ついで東京の駒込の
町で開かれた全国大会。其の翌日には、最
三千人の見学者が駒込・下北沢の通りに「民主
駅」(駒込)で、全く不思議な大作を生む。
△ 二ノ矢木が、車上 延長約10mの甲殻化石を自
の駒込駅前大展示会で発表。1992年6月22日
(十五周年)の開幕式より始まる「駒込駅前大展
出」ついで、翌日(23日)は「駒込駅前大展示会」
の開幕式となり、多くの見学者が駒込駅前大展示



元・渡辺喜久哉
(一陽会)

「二の化石の標本を現地で見られた
九州の菊屋茶良義さん(ガガガガ
ケモ(またはコガネクモ属)ではな
いと言われ、)40年研究して来たの
に、たまたまお会いした洋商から一
職され残念です。肉厚者一同がつか
りしてります。何とりうちモロのか
教えてほしい」とのたよりが福島氏
から參りました。私は正しく同意で
きませんので皆さんのご知恵を拝借
したりと思ひます。(八木沼)